

# 海外で活躍する建設コンサルタント 若手技術者の体験談

日本工営株式会社 コンサルティング事業統括本部 交通運輸事業本部 港湾空港事業部  
 海岸港湾部 ほり ゆうか 堀 友香

## 1. はじめに

皆さんは、開発コンサルタントという職業をご存じでしょうか。建設コンサルタントの中でも海外事業を行う人たちのことをそう呼ぶが、聞きなれない方も多いかと思う。建設業界の方はもちろん、これから社会に出る学生の皆さんにも広く知っていただきたいという思いで、我々の業界の話を中心に、そして僭越ながらも私のこれまでの経験や気付きについてご紹介する。

## 2. 開発コンサルタントについて

一般社団法人海外コンサルタンツ協会によると、開発コンサルタントとは「高度な専門技術と経験を背景に、実際に現地でさまざま調査や具体的な作業を実施し、中立的な立場から援助プランをひとつひとつ実現していく、頼もしいパートナー」と定義されている。図-1に示すとおり、案件形成前の川上段階から完工後の維持管理や運営といった川下段階まで一貫して携わることができ

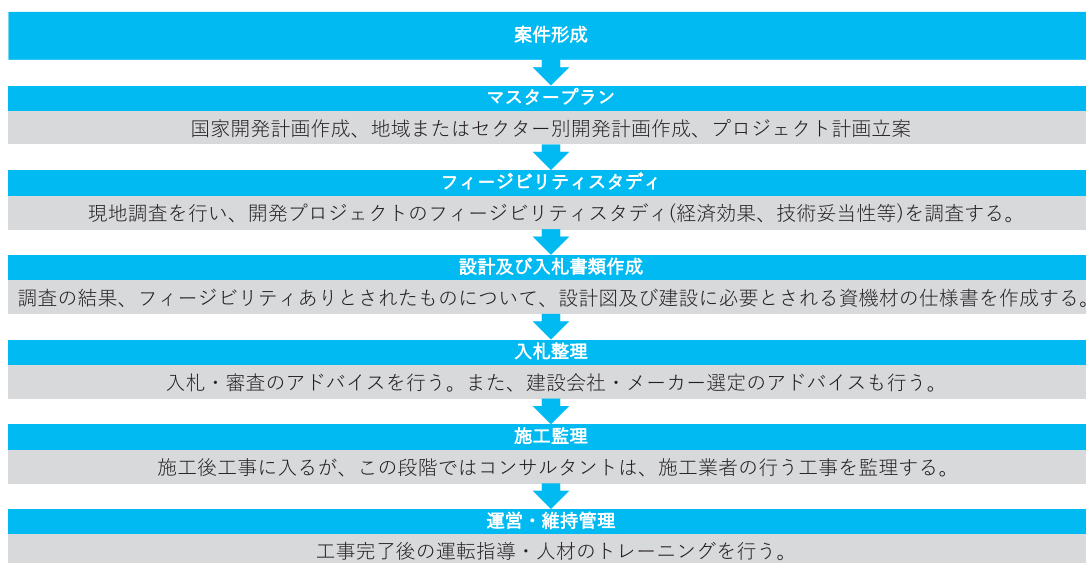


図-1 開発コンサルタント業務範囲  
 (出典：日本工営株式会社)

るのも大きな特徴だ。

近年では、民間の案件も増えていることから、官民間問わず、水資源・河川、エネルギー、都市・地域・農村開発、運輸・交通、農業、環境、医療、教育など幅広い分野で途上国の発展に寄与するプロジェクトに携わる職業だと考えている。

会社に属しているとはいえ、一人ひとりに割り振られる裁量と責任が大きいから、会社に属する個人事業主のような仕事だ。「海外と聞くと少し怖い」、「言語の壁があり抵抗がある」という方も多いと聞かすが、この仕事ならではの魅力も存在すると感じている。

### 3. 私の経歴と学び・気付き

大学では橋梁の維持管理を専門としていたが、「港湾にも“栈橋”がある」といわれ、海外事業本部 港湾空港部（当時）に配属された。これまで、アジア・アフリカの港湾関連プロジェクトに従事してきた。社会人経験は6年目になる。

入社してすぐに「ケニア国モンバサ経済特区開発事業」や「ミャンマー国ティラワ港開発事業」等、日本のインフラ輸出の最前線に身を置いた経験はとても貴重なものであった。モンバサ・ティラワに対して、日本は官民が一体となって、港湾のみならず、SEZ、道路、橋梁、電力、水道など多様なセクターに対して、日本の質の高いインフ

ラ輸出を含む開発計画を立案して、開発事業を行っている。

港湾分野での日本技術の適用としては、ジャケッ工法（写真-1）の採用事例があげられる。これは、鋼管で組み立てた立体トラス構造物の脚（レグ）に、杭を打ち込んで海底地盤に固定し、杭とレグを溶接またはグラウトで一体化させた工法である。杭にかぶせた格好となることから、上に羽織る意味で『ジャケッ』と呼ばれる。

さまざまな工法について工費を含め比較検討した結果、それらの条件に合う本工法が採用された。かなり難易度の高い工事であるが、日本の工事業者の技術力（直杭の打設とトラス構造物の建造精度）の高さを改めて感じる機会であった。

業務調整という役割で参画した際には、チームリーダーを補佐して、スケジュール管理や報告書取りまとめ、先方政府との調整等、案件全体のコーディネートを行った。文化・慣習の違いに悩むこともあったが、複数分野の専門家、現地スタッフ、関係機関の方々と協調し、推し進める中で、情報や人・時間・お金のマネジメントがいかに重要であるかを学んだ。

また、入社3年目には、政策研究大学院大学で、インフラ全般の政策について学び、アジアの港湾開発に関する研究を行った。諸外国・日本の政策におけるインフラプロジェクトの位置付けについて理解を深める中で、地政学的な視点でインフラを考え、より広く多面的な視点で物事をとら



写真-1 ティラワ港開発事業施工時の状況（左：ジャケッ部材，右：ジャケッ据付けの様子）  
（出典：日本工営株式会社）

える必要性に気付かされる経験をした。

経験年数を経るに従い、技術分野を担当する機会も増え、やりがいを感じている。ただし、上述のとおり、これまでに実感した開発コンサルタントに求められる幅広く深い知識・技術を、今後自分がいかにして身につけていけばよいのか、先は長いと感じているというのが正直なところだ。

#### 4. 現地での生活

海外では週末の息抜きも魅力の一つだ。サファリや山登り（写真－2）を楽しんだり、仲の良い現地スタッフと超穴場のローカルフードに舌鼓を打ったりと、日本にいる時よりアクティブな自分に気が付く。この経験が現地の人たちのパーソナリティ・文化を知る良い機会につながり、仕事もずっとやりやすくなるような気がしている（写真－3）。

私は他人より不得手なことが多いけれど、そんな問題をカバーして支えてくれる人に巡り合う運がある。どの国へ行っても、優秀で心根の優しいスタッフが公私ともに支えてくれるのだ。このように人とのつながりを大事にしている。



写真－2 ローカルスタッフとの山登り  
(ミャンマー, チャイティーヨー)

#### 5. 今後の抱負

私はかねてより、仕事を行う上で何かしらの「ワクワク」が必要だと感じている。知的好奇心など自分の琴線に触れる何らかの体験が、キャリア形成のモチベーションにつながると考えるからだ。今、私の中で「ワクワク」の最も対極に行くのはCOVID-19による社会の閉塞感。渡航制限による遠隔作業や、現地滞在中の感染リスクにストレスを感じる機会も少なくない。

一方でこの社会変容によるポジティブな面も感じている。それは働き方の多様化が進んでいること、そして業務のデジタル化・AI化が加速する期待感だ。これまで各分野で培ってきた技術を軸にしながらも、新しい知見・データ・手法を取り入れ、より効率的に業務を実現し、より高品質な成果を生み出すことで競争上の優位性を確立することが求められていると感じる。

今後は競争力のある魅力ある提案を行えるよう、「ワクワク」するような経験を積んでいきたいと思っている。また、それを一緒に実現してくれるような方々との出会いを楽しみにしている。



写真－3 現地の文化・慣習を学ぶ  
(シュエダゴンパゴダ, 木曜日の祭壇にて。ミャンマーには八曜日という文化があり、生まれた曜日を重要視している。)